想い出すこと

篠　田　勝　英　Katsuhide SHINODA

吉田城と初めて言葉を交わした日のことはよく覚えている。1973年の二月末か、三月始め、場所は紀伊國屋新宿店の洋書売場、いかにも彼にふさわしい場所だ。その日の午前中、仏文研究室で四月からの修士課程新入生に対するガイダンスがあったはずで、そこで顔を見覚えていてくれたのだろう、急に話しかけられてどぎまぎしたような記憶がある。家は東京だが京大出身であること、卒論はジュリアン・グラックで、「テーマチックを貫いた」こと、修士ではプルーストをやるつもりであることなどを、彼はこちらの目をまっすぐ見すえ、早口で一気に語った。少し圧倒されていたのかもしれない。なにしろ学部四年生を三回やる形で留年を繰り返し、先のことはあまり考えずに大学院に入ってしまったけど、はたしてこれでよかったんだろうか、などという迷いを捨てきれずにいた私には、彼の颯爽とした挙措、口跡が眩しさを感じさせずにはいなかったのだ。対抗するには心の中で、それにしても場違いに派手な恰好をした奴だ、と呟くのがせいぜいだった。

授業が始まってからは、修士一年で大部分の単位を取ってしまうのがふつうだったから、一緒に出る教室も多く、ふたりともわりと出席率のいい方だったので、雑談の機会が増えた。最初に感じたのは、美術、美術史への強い関心だった。京大の美術史はドイツ語をやっていないと話にならないのであきらめた、そうでなければ仏文ではなく美術史に行ったと思う、と語っていたのはいつだったか。それで想い出すのは、一度だけ千駄ヶ谷の彼の自宅を訪れたときのことだ。部屋の一角に衣装箱が積まれ、どうもぎっしり中身が詰まっているらしく、学生の感覚ではたいへんな衣裳持ちと思われたが、「もう着ない服ばかり」とこともなげに言い放ったのには、四月以来の観察で別に驚かなかった。驚いた、というより感心したのは美術書の多かったこと。とくに、これはまことに学生らしく、数年前から日本版が刊行されていたファブリ版の画集が山と積まれていたことだ。そしてよく見ると、横文字のものがたくさんある。一般向けの日本版ファブリ世界名画集はそれなりに工夫されたラインナップであったと思うが（たしか第一回か第二回配本にルドンが入っていたのが印象的だった）、原則はやはり大画家中心の無難な選択だった。当然、吉田城の満足するところではない。かなり前から、イタリア書房に走って、ファブリの原書を大量に店頭買いし、さらに日本未入荷のものを発註していたのである。イタリア・ルネ

サンスが中心で、チマブエ、シモーネ・マルテイー二など、古いところが目についたような気がするが、これはもっと後の会話から再構成した疑似記憶かもしれない。目にとまったのをはっきり覚えているのは、ファブリより少し小型の判型で、ずっと厚いシリーズだった。リッツォーリ版である。一作家全作品を一冊に収めたこのコレクションを、私はその時まで知らなかった。彼にはずいぶんいろいろなことを教わり、とりわけ書物に関する情報が多かったが、これはそのもっとも早い時期のものである。

その頃出入りした洋書店は、まず筆頭が田畑ビルに移る前、たしか榎本ビルという、やはり西新宿だが大ガードに近い雑居ビルにあったフランス図書、ついで大手の紀伊國屋、丸善の洋書売場、時として当時は四谷にあった欧明社、カトリックの本だとエンデルレ書店、もっと趣味的な本のときは銀座のイエナというところだろうか。授業の終わった後は喫茶店で果てしなく雑談ということが多かったが、何人かで連れ立って、洋書店をのぞくということもないではなかった。吉田城と一緒だったのは、なぜか日本橋丸善が多かったような気がする。本郷三丁目から地下鉄丸の内線で大手町に出る。この駅の乗り換えはいったん改札を出て、長い長い通路を抜けて、また改札を通って、今度は東西線に乗る。あるとき、東西線の改札の手前で彼が立ち止まった。なにやらもぞもぞしていると思ったら、切符が見つからないのだ。自動改札などまだ存在しない時代である。丸の内線を出る時に切符を渡してしまったんじゃないか、と問うと（たしか大手町と日本橋は同じ料金だったから、駅員に一言言って、切符を持ったまま出ることになっていた)、絶対に渡していない、ポケットに入れた、と言い張ってもぞもぞし続ける。しばしもがいた後、見つかった。切符が見あたらなかったのではなく、ポケットが見つからなかったのだ。その日彼はいたるところにファスナーで閉じるポケットのついた斬新なデザインのジャケットを着ていて、袖口に小さなポケットがあり、切符などを入れておくのに便利なのを、大手町駅の連絡通路が長すぎて、つい失念してしまったようだ。きっとその日初めて着たのだろう。でも黒のジャケットは彼によく似合っていた。

修士課程の二年間、授業のある時は始終顔を合わせていたが、休暇中に一緒に何かをした記憶はない。その代わりに忘れられないのは、ある夏に受け取った一通の手紙である。かつて信州学生村というものがあった。長野県の農家が夏休みに都会地の学生に格安料金で部屋を貸し、食事を提供するのである。その延長で各地のスキー宿が夏に同じようなことを始めたので、何人かで勉強道具を持ち込み、切磋琢磨を口実にひたすら清談にふけり、時として夜な夜な卓

を囲んだりしながら、学生の分際で高原の避暑を楽しむという安価な贅沢を何年か続けたのだった。吉田城はその場にはいない。どうも教室、研究室、書店以外の場所ではあまり共通の時間を過ごしていないのだから、異論は多いだろうが、われわれのつきあいはきわめて学問的色合いの濃いものだったと考えるしかあるまい。それはさておき、あるとき炎暑の東京でおそらく涼しげにラファエロ前派の画集などをひもといているはずの彼に、志賀高原から文字通りの暑中見舞いを送ったら、たちどころに返事が来た。かなり長い手紙で、読み進めると、謝辞、時候の挨拶がいつの間にか擬古文めいた文体に変わり、夏の夜の情景描写がファンタスティックに展開して、いつのまにか盂蘭盆会のお供えの野菜の擬人化群とディアーヌに率いられるギリシア・ローマ神話の形象の軍勢との、月光のもとでの戦いの絵巻が繰りひろげられたのには一驚した。その才気、才筆、博識、大したものだと今でも思う。手紙のオリジナルはなくしていないはずだが、残念ながらどこにあるか分からない。幻の創作は輝きを増すばかりである。けれども今にして思えば、退屈のあまりの手すさびだろうと思われる。まことに彼の「余暇」otiumは「文藝に捧げる余暇」otium litteratumであった。一緒に来ないかと誘ってみればよかったかなという気もするが、八月の後半であれば、年中行事にしていると聞いた軽井沢買い物ツアーの計画に余念のない日々だったかもしれない。

この手紙はおそらく1975年、すなわち彼の留学する年の夏のことだったと思う。話が前後するが、その前年、修士二年の後半は、彼も私も論文書きでほとんど登校しなかった。家にこもりがちの刺戟のない日々だったから、新聞の隅々まで目を通す。ふだんは読まない連載小説まで、つい毎日追いかけてしまう。その秋、朝日新聞の朝刊は有吉佐和子の『複合汚染』、夕刊は、タイトルを忘れてしまったけど、五木寛之の、オートバイで通勤する精神科医と患者の恋愛の話だった。たまに電話で近況を報告し合う時に、そんな話をしたことが想い出される。そして十月だったか、十一月だったか、日仏学院で久しぶりに顔を合わせた。と、書けば分かる人には分かるだろう。そう、フランス政府給費留学生の試験のためである。このときは一次の筆記試験で、しばらくあとの二次の面接がいつだったか覚えていないが、彼と同じ時間帯ではなかったのが不吉な徴候だった。案の定、私はあえなく敗退、彼はおおかたの予想どおり、首席で合格、翌年の秋、高等師範学校に向けて旅立った。二度目の渡仏である。修士の同じ学年の十人のうち、サンケイ・スカラシップで留学体験のある者がふたりいて、何かの選抜試験に合格して学部時代に短期間ながら語学研修をしてきた彼は、三人目の滞仏体験者だった。雑談の折りに話題がパリやフランス

の現地のことに及ぶと、われわれ外国未体験者は謙虚に（つまり、いじけて）、けれども若干の羨望を覚えつつ、彼ら新帰朝者の会話に耳を傾けたものだった。昨今のブルシエ受験生は一次試験を現地フランスで受けることができたり、あるいは一時帰国して日本で受験するなどと聞くと、まことに隔世の感がある。留学で初めて外国に行くのは当たり前、飛行機に乗るのも初めてというのが珍しくなかったのだ。

一年後にパリで再会するまで、手紙のやりとりが何度もあった。凍った空気にカリヨンの音が共鳴する冬のフランドル旅行の話には旅心をいたく刺戟され、ヨーロッパならではの、一日にして冬から春になるダイナミックな季節の転換を告げる便りには、関東地方特有の春先の不愉快な強風を忘れ、そして連休の頃には、まだ見ぬパリの街角を飾るミュゲの花を思い浮かべたものだった。そんなやりとりがふっつりと途絶えたのは七月になっていただろうか。出発前に私が受け取った最後の手紙の末尾に「今回は忙しいのでこれにて失礼、明日彼女が着きますので」とあった。

1976年の秋、吉田城はユルム街のエコール・ノルマルの寮を出て、大学都市のアメリカ館に居を定めていた。留学二年目の彼はテーズの方向を見すえて、国立図書館写本部での作業を着実に進めていたようだ。パリに着いて西も東も分からないまま、先輩諸氏の導きをたよりに、滞在許可取得や大学への登録や銀行口座開設を終え、同じ大学都市のなかで短期間に二回引越をした後、日本館に落ち着いていた私も、深まる秋の冷気を頬に感じながら、カルチエ・ラタンを中心に行動半径を拡げていった。物珍しさが先に立って、毎日異なることを異なる場所でやっていた私とは正反対に、彼は勤勉な毎日を送っていたようである。アメリカ館地下のカフェテリアに朝食を取りに行くとそれが分かった。早い時間といっても午前八時頃だっただろうか、私としては相当な早起きをしているつもりだったし、十二月になるとまだ暗い時間だったが、寝ぼけ眼で室内を見回すと、吉田城が典子さんと一緒にいる姿が眼に入る。同じテーブルについて、ゆっくりおしゃべりをしていたいところだが、ある時点できっぱりと「それじゃあ」と言って、大きなカバンを提げて出ていってしまう。またしても取り残された思いを何度か味わったものだ。

当時のアメリカ館は地上階の入り口が男女で分かれているのに、中ではつながっているという妙な構造だった。何度も呼んでもらったことがあるが、彼の部屋には一度も入ったことがないのに今になって気がつく。お招きはいつも典子さんの部屋で、まるで書斎と客間を分けているようだった。満足な設備のないところなのに、いつも留学生にはもったいないような御馳走があった。二人

の食生活の水準はかなり高く、折に触れてのアメリカ館への御招待はほんとうに楽しみだった。

留学中の想い出は数え切れないほどあるが、別に珍しいことがあるわけではない。先を急ごう。1978年の暮れに彼は帰国、翌年二月末に私もパリ暮らしを切り上げた。四月にそれぞれ関西と東京で教職に就き、以後二十六年間、学会で顔を合わせて立ち話をしたり、都合がつくと食事を一緒にしたりしたのを別にすると、国内では会う機会が激減して、パリで会った回数の方が多いくらいだ。そして記憶のなかで特別な色彩を帯びているのが、1985年の九月である。昨年（2005年）六月二十六日の典子さんの言葉にあったように、1985年は吉田城にとって特別な年だった。前年秋から東洋語学校（当時はまだイナルコではなくラング・ゾと呼んでいたと思う）で教えるかたわら、プレイヤッド版とロベール・ラフォン版のプルースト全集のテクスト校訂の仕事に打ち込み、質量ともに超人的としかいいようのない成果をあげ、そして体調を崩した年だった。

九月に会ったとき、思いのほか元気で、通りを歩いていて急に一歩も進めなくなることがあったというような話を聞いていなければ、医者にかかってかなり深刻なことを言われたというのが信じられないほどだった。鈍感な私には、大きな仕事を仕上げた直後の虚脱感から回復しつつあるところという印象のみが強く、帰国後に入院したことを人づてに聞いても、まさに他人事としか感じられず、1985年の夏の終わりにパリでともに過ごした時間は、ほかの時にはない輝きとともに、今でも鮮やかによみがえってくる。ブーランジェ通りの日当たりの悪い、けれども静かなアパルトマン、今はファスト・フードの店になりはててしまったカフェ・ド・クリュニーのテラス、たまたまそのときパリにいた修士時代の仲間と四人で会食した中華料理屋、そして中世の写本とプルーストの自筆稿が同じ場所に保管されている国立図書館写本部、私自身は短い滞在だったが、ずいぶんいろいろなところで会った。クリストがポン・ヌフを梱包していたときのパリである。

それから十五年ほど後、大学都市日本館の仕事をしていたとき、吉田城はパリに来るたびに声をかけてくれた。忙しい日程のなかで、日本館までやってくる時間をひねり出してくれたこともあるし、頼んだ買い物をわざわざ届けてくれたこともある。これはパリで手に入らないというわけではない、ただ日本製の方が安くて質がいい、という理由だけで頼んだのだから、申し訳ないことをしたと思う。しかも一月の大学教師繁忙期に、国立図書館での講演を控えて、出発直前まで準備に追われていたときに、彼のあまり得意ではない分野での買

い物をやってもらったことに、今になって思い当たる。面倒なことを言ってくるやつだと思っただろうが、二つ返事で引き受けてくれた。

その講演は2000年一月二十八日、BNFで開かれる「プルースト展」の記念行事として行なわれたものだった。時期が時期だけに日本から来るのは難しく、またなぜか留学生もほとんど姿を見せていないようだったから、おそらく内容はどこかで活字になっていると思うが、私は講演を肉声で聴いた数少ない日本人のひとりであった。「日本におけるプルーストの受容」がテーマで、ほかにイギリスとアメリカについても「受容」についての発表があったが、イギリスのときは居眠りしてしまい、アメリカはカリカチュアとパロディーの話だけだったので入り込むことができず、吉田城の発表だけを真剣に聴き、日本のプルースト学の裾野の広さと蓄積に、今さらながら感じ入ったのだった。

この年は七月初めにもAIEF（Association Internationale des Études Françaises）の年次総会（テーマは日本におけるフランス研究）での発表のために彼は来仏、日本からの他の参加者もまじえて、少しゆっくり話すことができた。こんな風に想い出していると、就職してからは、パリでしか落ち着いて歓談する機会がなかったような気がする。唯一の例外が、そして最後になってしまったのが、2001年の十二月、京大での集中講義に呼んでくれたときのことだった。集中は初めてだったので、それなりに緊張していたが、出席していた大学院生のなかに大学都市の旧レジダンが二人もいて、ずいぶん気が楽になったし、何よりも吉田城の細やかな心遣いがありがたかった。このときは昼食や夕食を一緒に取る機会が何度もあり、京都という都市に彼がどのように根を下ろしているのか、実感できたような気がしている。芝蘭会館に泊まって、文学部の新しい研究室に毎朝通った一週間は忘れがたい記憶となっている。

2003年春から一年間、今回は在外研修でパリに住むことができたが、その間彼と会う機会はなかった。翌年帰国が迫って荷造りを始めた頃、日本人研究者の論文審査でパリにやってきた彼と電話で打ち合わせて会う段取りを整えていたのだが、間の悪いことに私がひどい風邪を引いてしまい、結局後日を期すことになった。その二ヶ月ほど後、私の勤務校白百合女子大で学会の春季大会があり、会場でほんの一言二言挨拶を交わしたが、これは「後日を期した」約束とはほど遠いものだった。そして一年間があっという間に過ぎてしまった。だから私は彼との約束を、ただの口約束にすぎないのだが、果たしていないままなのである。

*　　*　　*

吉田城とのつきあいを顧みるのは、時期的に私の修業時代、遍歴時代の回顧そのものになるから、情動失禁的にありとあらゆることが溢れ出てくる。それを抑えに抑えながら、想い出すままに彼のことを書いた。第三者が読むことを想定して、追悼の言葉を記す気持にはどうしてもなれない。あいづちを求めずに、ただただ思い出話を繰りひろげるだけだった。わざわざ読んでもらうようなことではなかったかもしれない。あなたはやがて忘れるだろうし、私もいずれ忘れてしまうと思う。けれどもひとつだけ覚えておきたいことがある。吉田城はほんとうに衒いのない人物だった。ブルシエの試験にトップで合格したことと、透析がどんなに辛いかということを、まったく同じ口調で、照れも作為も強がりもなしに、淡々と語ってくれる人物だった。もしそんな風に語れる相手のひとりとして私が選ばれていたのだったら、これはちょっと嬉しい。いやこんな嬉しいことはない。

（しのだ・かつひで　白百合女子大学文学部教授）